資料２

和歌山大学 南紀熊野サテライト　事業総括書
（2022 年度）

2023 年 7 月

和歌山大学 南紀熊野サテライト

和歌山大学　南紀熊野サテライト事業総括書（2022年度）

目　次

1　はじめに　……　2

2　具体的活動成果・事業実施状況

【1】学校型事業　……　3

【2】非学校型事業　……　11

【3】組織基盤の強化　……　12

3　参考資料（新聞掲載資料一覧 ）

１．はじめに

◆サテライトで学んだ社会人学生が地域の中核となって活躍中！

和歌山大学南紀熊野サテライト（以下、「サテライト」）は、2005 年４月に「地域型サテライト」として設置され、１８年が経過した。サテライトで学んだ多くの社会人学生が、地域の中核となって活躍している。また、サテライト受講生が地域で講師として後進の人材育成をする側になるなど、学びの好循環を生み出している。

高等教育では、地域ニーズを的確にとらえ、体系的な地域学の学習機会を提供している。

また、和歌山大学南紀熊野サテライト連携協議会企画運営会議では、サテライトが令和９年度までの６年間に目指すべき方向性と具体的な取り組み、成果指標、目標値を掲げた案「和歌山大学南紀熊野サテライトみらい戦略四期計画アクションプラン」（以下、「アクションプラン」）を策定した。

サテライトでは、このアクションプランに基づき、急速に変化する知識社会において、地域の知の拠点として、各プラットフォームを連携する地域ステーションの役割を担えるように教育、研究、社会貢献の活動を推進している。

本報告書において2022年度事業を総括する。

◆2022 年度事業の特長・課題

【事業の特徴】

（１）実践力のある人材育成、ニーズに合った多様な学習機会を提供

地方創生に資する講座、授業を実施。（地域づくりの理論と実践Ｃ）

全国から観光や地域経営を学びに来る塾となっている。（南紀熊野観光塾）

コロナ禍でも継続した学習のニーズに応えるためにオンライン配信、また野外フィールドを活用した教育機会の提供。（経営人類学、癒やしとメンタルヘルス、旅人の哲学）。

（２）高校との連携強化

大学生と高校生が共同で学び合う機会を支援。

「大学授業の公開制度」にて、高校生が地域開講している大学講義を受講して進学に繋げている。

（３）学生、教員の地域交流活動の支援、教育研究の支援、地域情報の提供

学生や教員の調査研究に必要な地域情報を提供。地域での活動を支援。

（４）産学連携、共同研究、教育研究プロジェクトの支援

他大学や学内の調査研究を推進。

【今後の課題】

（１）教育研究活動による地域発展モデルの構築と、更なる連携推進で「知の循環」を目指す。

（２）学内外の支援組織体制の構築に向けて情報の共有と活用を推進。

（３）サテライトを拠点として、地域で活動する学生、同窓会組織、小中高大等の交流推進。

（４）学内外へ大学活動とサテライトの認知向上のための戦略的な広報活動。

2．具体的活動成果・事業実施状況

【1】学校型授業

アクションプラン【1】学校型事業では、「1－1　実践力のある人材育成、リカレント教育の促進」、「1－2　受講ニーズを反映した授業編成の改善」、「1－3　県内外の小中高大の連携強化、学生のフィールド教育支援」、「1－4　公開講座の充実、開講形態、開講場所の多様化促進」を目標に以下の事業を実施した。

1—1「実践力のある人材育成、リカレント教育の促進」、「1－2　受講ニーズを反映した授業編成の改善」

（ｉ）高等教育の実施

サテライトでは、本学が有する高等教育機能を活用して、地域課題の探求及び社会人の学びなおしやスキルアップなど、多様な学習ニーズに即した学部開放授業と大学院科目の開講を行ってきた。

≪大学院科目の開講≫

本年度は和歌山大学大学院経済学研究科の科目を前期３科目、後期４科目の合計７科目を開講した。授業のテーマとしては、社会人受講生にとって生活の知識となりやすい法律のニーズを満たすことを目的に民法や社会保障制度などの法律に関する授業。また、農業が主な産業基盤である南紀熊野におけるマーケティング、アグリビジネスといった経済関係の授業を開講した。

（前期開講）

授業科目名	担当教員	受講者数		
		サテライト	大学院生	合計
家族関係法	和歌山大学経済学部 吉田　雅章教授	5	1	6
社会保障法	和歌山大学経済学部 金川めぐみ教授	6	2	8
マーケティング論	和歌山大学 柳　到亨教授	6	12	18
合計		17	15	32

（後期開講）

授業科目名	担当教員	受講者数		
		サテライト	大学院生	合計
アグリビジネス論	和歌山大学食農総合研究教育センター 岸上　光克教授	6	3	9
経済思想史	和歌山大学経済学部 阿部秀二郎教授	7	4	11
公益事業論	和歌山大学経済学部 上野　美咲講師	5	7	12
現代中国経済	和歌山大学経済学部 金澤　孝彰教授	2	4	6
合計		20	18	38

≪授業の概要と成果≫

「家族関係法」では民法第４編親族の離婚と第５編相続の遺産分割契約といった民法の中でも家族法に焦点を当てた授業を開講した。本授業は「結婚と離婚」、「遺産相続」といった民法の中でも特に身近で起こりうる可能性のある事例を取り上げ、実際に起こった事例の最高裁判決の判例分析や民法学会の動向を踏まえた授業展開を行った。また、テレビドラマ「離婚弁護士」を視聴することでより分かりやすく、より身近に民法を感じることのできる授業となった。

「社会保障法」では、社会保障の制度について、人権保障の観点からその原理を考えていく授業を開講した。現代日本においては、少子高齢化の深刻化や家族形態の多様化など様々な要因から社会福祉制度が揺れ動いている時代であるということを念頭に、これからの日本で社会保障制度に起こりうるありとあらゆる可能性について考え、具体的な法改正の内容にまで踏み込んでいく授業となった。

「マーケティング論」では、基礎的なマーケティング理論と概念を理解していく授業を開講した。各授業では、「マーケティング」、「デザイン」、「プロモーション」などをテーマに取り上げながら、「ヘルシア緑茶」、「ユニクロ」、「エア・ジョーダン」といった実際の商品や企業の手法やヒットの流れを具体的に分析しながら、より詳細なマーケティングについて学ぶ授業となった。

「アグリビジネス論」では、グローバルとローカルの両視点から日本及び世界のアグリビジネスの現状・問題点・課題等について総合的に考える授業を開講した。教員と受講生が議論を積極的に行いながら、食料問題や環境問題まで広げながら、多角的な視野でアグリビジネスを考える授業となった。

「現代中国経済」の授業風景

「経済思想史」では、経済学者がどのような制約条件に基づいて経済理論を構築しようとしていたのかを検討する授業を開講した。経済学という普遍的なテーマに対して、それを思考している経済学者は特定の時代・空間の中で思考している。この時代的・空間的制約を考察することで歴史的な側面から経済学を分析することで多様な視点から経済学を学ぶ授業となった。

「公益事業論」では、公益事業を取り巻く様々な課題等を理解し、その課題解決に向けた糸口を導き出す授業を開講した。今までの公益事業の在り方について官と民の役割分担等の観点から検討しつつ、再生可能でクリーンな自然エネルギーという新しいエネルギー分野においては着目しつつ、新しい時代の公益事業について現実社会で適応する際の課題等について全体で討論をおこなう授業となった。

「アグリビジネス論」の授業風景

「現代中国経済」では、中国共産党第２０回党大会以降の中国の国内経済および対外開放の展望と課題についてとりあげ、今後の中国経済の方向性を検討する授業を開講した。テキストの輪読・討論の他に、開講期間中に中国では毎年恒例の中央経済工作会議が開催される頃だったことから、そこで決定される2023 年の中国の経済方針も踏まえ最新の中国経済の方向性をリアルタイムで考察していく授業となった。

≪学部開放授業の開講≫

本年度の学部開放授業は前期３科目、後期２科目、通年１科目の合計６科目開講した。南紀熊野地域の諸課題に対する地域ニーズの高い内容について、学内研究の成果の地域還元として授業に編成して開講。

（前期開講）

授業科目名	担当教員	受講者数		
		サテライト	学部生	合計
経営人類学	和歌山大学観光学部 出口　竜也教授ほか	3	19	22
コロナ後の世界と私たちの生活	和歌山大学経済学部 金川　めぐみ教授ほか	9	60	69
癒やしとメンタルヘルス	和歌山大学経済学部 藤永　博教授ほか	20	30	50
合計		32	109	141

（後期開講）

授業科目名	担当教員	受講者数		
		サテライト	学部生	合計
暮らしと法律	和歌山大学経済学部 吉田　雅章教授	6	10	16
旅人の哲学	和歌山大学名誉教授 天野　雅郎	21	50	71
合計		27	60	87

（通年開講）

授業科目名	担当教員	受講者数		
		サテライト	学部生	合計
地域づくりの理論と実践C	和歌山大学観光学部 大浦　由美教授ほか	12	15	27

≪授業の概要と成果≫

「経営人類学」では、「経営人類学」という 1993 年にできた「会社」や「経営」の問題を人類学的アプローチで明らかにしようとする学問領域についての授業を開講した。実際に学問を確立したさまざまな学問分野の研究者を全国から招集し、ゲスト講師として登壇していただくとともに、受講生と活発な意見交換を行うことで幅広い学問知識を身につけることができる授業となった。

「コロナ後の世界と私たちの生活」では、新型コロナのパンデミックが引き起こした影響を検証し、混沌の時代を生きていく社会のあり方や個人の暮らしを考える授業として開講した。「新型コロナが福祉や雇用にどのような問題を引き起こしているのか」、「新型コロナという経験したことのない大事件のもとで、判断を間違えないための情報の読み方」、「人と人のつながり、ヒトとウイルスの関係、人間を含めた生態系(環境)」これらの観点で新型コロナについて多面的に幅広い視野で考えることで、これからの生活を考えていくことができるようになる授業となった。

「癒やしとメンタルヘルス」では、アニマルセラピーやアニマルウェルフェアについて取り上げ、「癒やし」の観点とストレスマネジメント及び感情マネジメントの観点から考える授業を開講した。フィールドワークを中心に行う授業となり、白浜町の「アドベンチャーワールド」においてアニマルセラピーにおける「癒し」を体験するとともに、太地町ではイルカとの触れ合いや、シーカヤックなどを体験することで「スポーツリクラゼーション」などの「癒し」といったメンタルヘルスを様々な「癒し」により体感しつつ、南紀熊野の魅力の再認識につながる授業となった。

「癒やしとメンタルヘルス」の授業風景

「暮らしと法律」では、日々の暮らしに密接に関係する民法の成年後見制度、消費生活、医療事故、離婚、相続に関する様々な問題を TV ドラマや映画鑑賞をもとに、それに講師が解説を加える形式型で授業を開講した。法律という難しいイメージを持たれがちな学問をわかりやすく、親しみやすい媒体を使うことで受講生の理解につながりやすい授業となった。

「旅人の哲学」では、哲学という学問を「旅人」というテーマに絞る授業として開講した。旅の文学の歴史を振り返りながら、日本人にとって、旅とは何であったのかを宗性や芸術性の原点として辿り直し、日本人の心の中に旅人の哲学が脈打っていることを確認することができる授業となった。

「地域づくりの理論と実践C」では、実践者を招き、地方創生における農山村の再生手法として注目を集める都市農村交流によるホスピタリティ人材の育成をテーマに掲げて理論と実践から農山村における地域づくり戦略を学んだ。授業では、受講者における地域での学びの質的変化やキャリア形成に与える影響の教育効果も検証し、さらにアンケート調査も実施された。受講した大学生の地域での新規就農や地域での就業に繋がっていると報告があり優良な評価を得た。

「地域づくりの理論と実践C」の授業風景

（ⅱ）南紀熊野観光塾の開催

和歌山県「南紀熊野地域」における、観光産業従事者及び、地域活動者を対象として、「世界のトップレベルの観光ノウハウを各地に広める観光カリスマ」の山田桂一郎氏を塾長に開催。持続可能な地域経営を考えて自主的に取り組む次世代の観光産業のリーダーとなる人材育成を行うための塾。今年度は、オンラインにて開催した。

≪令和４年度開催概要≫

開　催　日：令和５年３月１４日（水）１４：３０～１７：００　参加者５０名
場　　所：和歌山県立情報交流センターBig・U情報研修室２（オンライン開催）
講　演　者：出口　竜也　氏　（和歌山大学観光学部教授）
竹林　浩志　氏　（和歌山大学観光学部准教授）
此松　昌彦　氏　（和歌山大学教育学部教授　兼　和歌山大学南紀熊野サテライト代表）
山田　桂一郎　氏　（和歌山大学南紀熊野サテライト客員教授）
吉田　秀政　氏　（一般社団法人福島市観光コンベンション協会事務局長）
テ　ー　マ：新年度を迎えるにあたって何をすべきか
内　　容：山田桂一郎客員教授を塾長とし、ゲストスピーカーには吉田秀政氏を招聘し、南紀熊野観光塾を開催した。吉田氏からレジリエントな観光地域づくり組織のつくり方の話題提供をいただき、続いて、国内の観光需要も戻りつつある中でわれわれがなすべきことは何かについてのトークセッションを行った。

○参加者の傾向

参加者のうち１６名が和歌山県内からのアクセスで残り３４名は県外アクセスとなった。参加者の属性としては主に観光業関係者、大学関係者、公務員などであった。

○開催成果

南紀熊野地域では、コロナ明けが見えてきたことで、外国人をはじめ観光客が徐々に戻ってきている状況にある。そこで、観光業界関係者はどんなことをしていくべきなのかを主なテーマとしてオンラインで開催した。全国から５０名の参加者が集まることで、交流を通して持続可能な観光を担う人材育成と、塾生同士の繋がりで人財交流の輪が広がった。

南紀熊野観光塾の風景

１－４　「公開講座の充実、開講形態、開講場所の多様化促進」

（ｉ）オープンキャンパスセミナーの開催

サテライトにおいて開講している授業を受講するための判断材料にしてもらうことを目的に、サテライトと南紀熊野サテライト連携協議会が共催で授業を担当する教員による公開講座を例年開催している。同時にサテライトより受講生募集説明会を開催している。

≪令和４年度前期開催概要≫

開　催　日：令和４年４月１６日（土）１３：３０～１５：３０　参加者　２５名
場　　所：和歌山県立情報交流センターBig・U　研修室
講　演　者：藤永　博　氏（和歌山大学経済学部　教授）
　　彦次　佳　氏（和歌山大学教育学部　准教授）
　　川乗　賀也氏（同朋大学　社会福祉学部　准教授）
テ　ー　マ：心と身体を癒す～触れ合いと思いやりの効用～
講演内容：コロナ禍が続き、戦争が起こる世界においてメンタルを一定にコントロールし暮らしていくための様々な「癒し」を学んでいく。動物との触れ合い（アニマルセラピー）や自分の身体への思いやり（リラクセーション）などの「癒し」の方法はなぜ、「癒し」につながるかなどを講義に先立って解説した。

○参加者の傾向

参加者２５人中２５名からアンケートの回答をいただいた。西牟婁地域の居住者は ２１名、東牟婁地域の居住者は ３ 名、その他地域（御坊市）は１名という内訳であった。これは開催場所が西牟婁地域であることから西牟婁地域の参加者が多い傾向となった。西牟婁地域と東牟婁地域では地理的な要因が参加ハードルを上げることがより明確に表れた。開催場所については学部開放授業の開講場所に応じて、西牟婁地域と東牟婁地域の両方での開催も次回以降検討していきたい。

○開催成果

オンラインによる授業から対面での授業が本格化した時期であったことから参加者確保と受講生確保が重要であったが、２５名の参加者が確保することができた。また、そのうち半数の１２名がその後の受講につながった。これは、コロナ明けにおける当サテライトでのフィールドワークをメインとした授業のオープンキャンパスセミナーであったため授業の魅力を伝えられたと考えられる。

令和４年度前期オープンキャンパスセミナーの風景

≪令和４年度後期開催概要≫

開　　催　　日：令和４年８月２１日（日）１３時３０分～１５時３０分　参加３２名

場　　所：和歌山県立情報交流センターBig・U 情報実習室２（オンライン配信も同時開催）

講　演　者：岸上　光克氏（和歌山大学食農総合研究教育センター教授）
天野　雅郎氏（和歌山大学名誉教授）

テ　ー　マ：①日本農業構造の動向　～2020 年度農業センサスと令和３年度白書より～
②旅人の哲学～ウェルカム・レクチャー

講演内容①：近年では、消費者の農業への関心や高まりや新たな農業ビジネスの展開、地方創生戦略など多方面から、農業振興の取り組みが見られるが、今回の講義は具体的な事例などではなく、既存の統計データなどをもとに、日本農業の現状を確認した。後期開講の「アグリビジネス論」では、家族農業経営の変容や企業の農業参入の理論について解説するが、それに先立ち最新の農業（構造）の状況を、ホームページなどでも公開されている『令和３年度食料・農業・農村の動向（白書）』と「2020 年農林業センサス」を使って確認した。

講演内容②：１２５年前にフランス領ポリネシアのタヒチ島で画家のゴーギャンが問いかけた「我々は何処から来たのか、我々は何者か、我々は何処へ行くのか・・？」について、「我々」という名の「旅人」が、宇宙から生命へと、生命から動物へと、動物から人間へと、この地球を経巡り、旅を続ける姿が浮かび上がってくる壮大な、はてしない「旅人の哲学」を背景にして、どのような意図や目的が後期の同名の授業に存在しているのかについて講演した。

○参加者の傾向

参加者３２人中２２名からアンケートの回答をいただいた。西牟婁地域の居住者は１８名、その他地域は４名という内訳であった。これは開催場所が西牟婁地域であることから西牟婁地域の参加者が多い傾向となった。しかし、オンラインでの開催であったにも関わらず東牟婁地域の参加者がいなかったことから、そもそもの周知不足が懸念される。

また、年齢層については、２２名中２２名が５０代以上であった。（５０代２名、６０代６名、７０代１１名、８０代３名）本学全体の課題ではあるが、参加者の高齢化が顕著に表れた。また、７０代以上の参加者割合が高いことからも今後は６０代～５０代、４０代未満の参加者増加への取り組みが課題である。

○開催成果

後期学部開放授業は前期と異なり、フィールドワークの授業はないために参加者数の減少が見込まれていた。そこで、南紀熊野地域における主要産業といえる農業分野に関するテーマとサテライトでの人気が高い天野名誉教授の講演の２本立ての開講となった。また、オンライン配信を用いることで紀南地域全域をカバーできるような体制で行った。結果、参加者としては、前期オープンキャンパスセミナーより１０名多くなった。しかし、後期学部開放授業への受講につながったのは３２名中９名のみだった。

令和４年度後期オープンキャンパスセミナーの風景

（ⅱ）サイエンスカフェの開催（令和５年度より「なんくまカフェ」に名称変更）

サテライトでは、「夕方の仕事終わりに気軽に参加できる講座」を開催して欲しいとのニーズがあったことから、ドリンクを飲みながら、参加者と研究者が気軽に語りあえる場としてサイエンスカフェを開催している。今年度は、サテライトがある田辺市で毎年７月に開催されている「田辺祭」についての講座を以下の内容で行った。

≪令和４年度開催概要≫

開　催　日：令和4年7月23日（土）１８：３０～２０：００　参加者２５名
場　　所：tanabe en＋（タナベエンプラス）
講　演　者：吉村　旭輝　氏（和歌山大学紀州経済史文化史研究所　准教授）
　　出口　竜也　氏（和歌山大学観光学部教授）
　　中牧　弘允　氏（国立民族学博物館名誉教授）
　　住原　則也　氏（天理大学国際学部教授）
　　三井　泉　　氏（園田学園女子大学経営学部教授）
テ　ー　マ：田辺祭について
内　　容：「日本の祭りの現状と今後の継承」をテーマに、いかに地域の伝統的な祭りを守り、いかに次世代へと継承していくべきなのか、この世界共通のテーマに経営学、人類学、民俗学の立場から切り込んでいくサイエンスカフェを開催した。

○参加者の傾向

参加者２５人中１６名からアンケートの回答をいただいた。１６名中１５名が田辺市在住の方で１名が白浜町在住の方であった。また、年齢層についても１０代～８０代の幅広い層の方が参加された。

○開催成果

「田辺祭」は４５０年あまり続く伝統的な祭りである。しかし、後継者不足などの課題も多く抱えている。５人の研究者が、「経営人類学の視点から今後の祭の継承を考える」をテーマに話題提供された。また、今年の田辺祭には、和歌山大学生も参加しており、参加者のアンケートには、「町内外の学生の意見を聞けてよかった」という感想が寄せられた。

しかし、一方で開催日を田辺祭の日に設定したために、参加したかった祭関係者の出席者が少なくなることにつながってしまったことから、開催日の設定に課題が残った。

サイエンスカフェ「田辺祭カフェ」の風景

【2】非学校型事業（地域連携・地域貢献）

アクションプラン【2】非学校型事業では、「2―1　自治体との情報連携強化、地域連携情報収集の強化」、「2―2　産学官連携、地域での共同研究、教育、研究プロジェクト支援」、「2－3　学生（教員）の地域交流活動の支援、地域情報の提供」、「2－4　研究会、学会、現地報告会等の支援、活動成果の発信、授業化、社会実装」、を目標に以下の事業を実施した。

2－2　産学官連携、地域での共同研究、教育、研究プロジェクト支援

（ｉ）クオリティソフト株式会社と本学の包括連携協定の締結

サテライトの地域連携マネージャーの活動から、白浜町のＩＴ企業であるクオリティソフト株式会社との連携協定の締結が実現した。

≪実施概要≫

令和４年１１月１５日（火）

和歌山県へき地複式教育研究大会（田辺市中山路小学校で開催）にクオリティソフト株式会社が開発したマジカブランカ（オンライン授業システム）を遠隔授業に導入した。

令和４年１１月３０日（水）

クオリティソフト株式会社と本学との包括連携協定を締結した。

（ii）串本町と本学の包括連携協定の締結

令和５年１月１９日（木）

串本町と本学が、地域社会の発展と学術の振興に貢献することを目的とした包括連携協定を締結した。

2－3　「学生（教員）の地域交流活動の支援、地域情報の提供」、2－4「研究会、学会、現地報告会等の支援、活動成果の発信、授業化、社会実装」

（ｉ）田辺祭における調査及び報告会の開催

和歌山大学紀州経済史文化史研究所が、７月２４日～２５日に田辺市で開催された「田辺祭」の調査を行った。聞き取り調査の成果を OSM と LocalWiki を活用して発信し、その結果を地域に還元する地域情報の「見える化」の実現モデルを目標とした。さらに、後日、田辺市内において調査の成果報告会を開催した。

サテライトは、現地における調査支援や事務支援などを行った。また、「田辺市大学連携地域づくり事業」への申請支援も行い、採択にもつながった。

≪調査概要≫

調　査　日：令和４年7月２３日～２６日
場　　所：田辺市街地
参 加 機 関：和歌山大学紀州経済史文化史研究所
　　和歌山大学南紀熊野サテライト
　　株式会社紀伊民報
　　和歌山県立神島高等学校　写真部

≪報告会概要≫

開　催　日：令和５年１月２９日
場　　所：鬪雞神社社務所
報　告　者：和歌山大学紀州経済史文化史研究所
　　和歌山県立神島高等学校　写真部

田辺祭への実地調査の風景

○活動成果

本調査における活動結果は、株式会社紀伊民報様との協力により「LocalWiki」に掲載され、４５０年あまり続く「田辺祭」をデジタル媒体によって「見える化」することにつながった。昨今の新型コロナウイルス感染症の影響により、３年間「田辺祭」は中止状態であった。

本年度、田辺祭は３年ぶりの開催（縮小）であったが、来年度は通常開催を予定している。そのため、サテライトでは、来年度以降の調査においても継続的な支援を行う。

活動報告会の風景

【３】組織基盤の強化

アクションプラン【３】組織基盤の強化では、「３－１　更なる「知の拠点」へ既存の組織や修了生と連携」、「３－２　他大学、機関と連携した活動推進」「３－３　同窓会組織や修了生と連携、「知の循環」を推進する活動支援」、「３－４　戦略的な広報、PR ツール強化、地域振興の取組みに参画」を目標に以下の事業を実施した。

３－１　「更なる「知の拠点」へ既存の組織や修了生と連携」

（ｉ）きのくに活性化センターとの連携

きのくに活性化センターは、田辺、新宮両広域市町村圏組合（紀南地方全自治体）や田辺、新宮商工会議所、ＪＡ紀南、和歌山県、サテライトの参画による調査研究機関として、紀南地域の諸課題に関するリサーチや相談窓口の役割を担い、地域の価値をブラッシュアップする事業を提案するとともに、協同で実践し、地域と地域、地域と人を繋ぐ「場」の創出を行っている。

きのくに活性化センターには、サテライト代表と地域連携コーディネーターが、委員として参画している。

（ii）　和歌山大学における連携体制の強化

本年より本学の事務職員を１名配置することにより、より円滑な和歌山大学内での連携強化につながった。また、紀伊半島価値共創基幹（通称：Kii-Plus）の定例会議に出席し、価値共創オフィスや各センター・サテライトとの間での定期の情報共有を行った。

また、Kii-Plus のプログラムオフィサーがサテライト調整会議メンバーに参加することで本学とサテライトの情報共有の連携強化を図った。

さらに、2021 年度には地域連携マネージャーとして元高校教員をサテライトに配置することで教育と企業との連携や高大連携に関する積極的な活動を展開した。

３－２　「他大学、機関と連携した活動推進」

（ｉ）各種関係組織との会議開催

≪和歌山大学南紀熊野サテライト調整会議（令和４年１１月までオフィス会議）≫

和歌山大学紀伊半島価値共創基幹（Kii-Plus）とサテライト間での情報共有やサテライトの地域連携、運営方針に関すること協議する定例会議を毎月開催した。

≪和歌山大学南紀熊野サテライト連携協議会≫

和歌山大学南紀熊野サテライト連携協議会は、紀南地域の活性化、文化の向上のため、サテライトが地域のニーズに応え充実した高等教育サービスを提供できるよう、紀南地域と和歌山大学との連携を強化するとともにサテライトの活用促進を目的としている。

6月28日には幹事会を、7月22日には総会を開催し、サテライトの年間活動報告や事業計画を承認した。

南紀熊野サテライト連携協議会の会議風景

3－3　「戦略的な広報、PRツール強化、地域振興の取組みに参画」

（ｉ）インターネットによる情報発信

大学の入試情報や学生募集要項の他、オープンキャンパス、主催講座等の情報を紀伊半島価値共創基幹と連動したサテライトホームページの定期更新を行った。また、学部開放授業リーフレットにサテライトホームページのQRコードを掲載し、スムーズな案内に努めた。

（ii）各連携機関との広報活動

和歌山県立情報交流センターBig・U入口配架コーナーにパンフレット等の配架を行う。南紀熊野サテライト連携協議会構成１１市町村の広報誌への掲載や紀南地域の地方新聞会社への記事掲載などを行った。